

平成 30 年度第 3 回 京都市市民参加推進フォーラム 摘録

■開催日時：平成 30 年 11 月 28 日（水） 午後 6 時 30 分～午後 8 時 30 分

■開催場所：職員会館かもがわ 2 階 中会議室

■議題：

- (1) 施策 6「子ども，大学生など若い世代の市政への参加の推進」の進捗管理について
- (2) 施策 1, 4, 5, 8 の進捗管理について
- (3) 市民公募委員サロンについて

■報告事項：

- (1) 新たに設置された附属機関等について
- (2) 市民参加に関係する新しい事業や取組について

■公開・非公開の別：公開

■出席者：

市民参加推進フォーラム委員 11 名

(池田委員，内田委員，大鳥井委員，金田委員，兼松委員，佐々木委員，篠原委員，菅谷委員，杉山委員，壬生委員，森川委員)

■傍聴者：2 名

■特記事項：

動画共有サイト YouTube（ユーチューブ）を利用し，後日，音声配信を実施する。

【議事内容】

1 開 会

<事務局>

はじめに，本日の委員の欠席状況についてだが，桜井委員，ハッカライネン委員，山野委員，吉岡委員が欠席である。出席委員が委員の過半数を超えており，会議は成立となるので，開催させていただく。

会議の摘録については，後日ホームページで公開するとともに，会議の音声を後日「ユーチューブ」で配信するので御了承いただきたい。

本日は篠原委員が委員に就任されて初めて出席されているので，篠原委員から一言いた

だきたい。

<篠原委員>

NPO 法人場とつながりラボ home's vi の篠原です。元京都市未来まちづくり 100 人委員会の委員であり、現在はワークショップを運営する側になっている。これからよろしく願いします。

<事務局>

では、以後の議事進行は杉山座長にお願いする。

2 座長挨拶

<杉山座長>

早速、事務局から議題と本日の流れについて説明をお願いします。

<事務局>

(議題の説明、資料確認、時間配分について説明)

3 議題

議題 (1) 施策 6「子ども、大学生など若い世代の市政への参加の推進」の進捗管理について

<杉山座長>

議題「施策 6「子ども、大学生など若い世代の市政への参加の推進」の進捗管理について」に入りたいと思う。まずは事務局から資料の説明をお願いします。

<事務局>

(資料 1「施策 6「子ども、大学生など若い世代の市政への参加の推進」に関する調査概要」、資料 2「アンケート結果概要」、資料 3「施策 6 を分析するための情報について」説明)

<杉山座長>

平成 32 年度の計画改定までのあと 2 年の間に、特に重点的に取り組むべきことを抽出するというのが今年度の我々の役目である。資料 3 を見て、施策 6 の進捗をどう判断するのか、今後どういうところを重点的にやっていけばいいのか、今後につながるようどう提言していけばいいのかといったことについて意見をいただきたい。

<佐々木>

資料 2 の 4「市政情報の入手先」からは、ネット媒体よりもアナログ媒体で市政情報を得

ていることが分かるが、これは、現状の SNS 等での発信が不十分という見方もありえるのではない。資料 3 の「アイデア」では、SNS で積極的に発信してはという意見も出ている。

資料 2 と 3 の結果から、「アナログ媒体が重要である」と分析するのか、それとも、「SNS での発信が不十分である」と分析するべきなのか、考えるべき点だと思った。

<杉山座長>

奇しくも先日のワークショップではその点について、若者から生の意見をいただいた。ワークショップに参加した池田委員から紹介いただきたい。

<池田委員>

先日のワークショップでは、京都市は SNS で多くのアカウントを持っているが、その中身は、改行せずつらつらと難しい言葉で文章のみを投稿しており、タイムラインに流れてきても目に留まらない、という意見が出た。

企業のツイッターの様に画像を載せるなど、少し改良するだけで目に留まるようになると思う。絵文字の使用にしてもそうである。参加した大学生も『京都市がこんなふざけた文章をツイートするのか』と、1 回バズらせてもいいのではないか』と言っていた。

<杉山座長>

おおむね、参加した若い人の意見を池田委員が代弁して下さったように思う。

参加したいという意欲を持っている人は紙媒体を見ているが、一般の人はやはり SNS の方に注目していて、そちらには今のところ市の情報は目に留めりにくいのではないかと、というのがワークショップでの大方の意見だった。

<金田委員>

市政情報の入手先について、紙媒体が重要であるかという点についてだが、私もそうではないと思っている。「市の情報はどこにあるか」と聞かれると、ステレオタイプの「広報紙」等が意識に挙がるようになっており、調査にもそうしたバイアスがかかっているのではないかと考えている。

SNS については、SNS を使えば若者が見るのかという点と必ずしもそうではなく、若者が関心をもてる投稿の方法を工夫しないといけない。

決して紙媒体が不要になったというわけではないと思うが、新しい媒体を京都市がまだ使いこなせておらず、若者が情報をキャッチできるような発信の仕方が今後の課題であると思った。

資料 2 の 3 の (3) 「市政に参加したことがない理由」に「選挙以外で市政に参加できる制度があると知らなかった」、「参加する機会がなかった」とあるが、裏を返すと「知るチャンスがあれば」、「行ける機会があれば」参加するということだと思があるので、そういう点

をうまく見せることが一つのポイントになると思う。

<兼松委員>

ツイッターの管理などは、大学生に任せた方がいいと思う。「SNS を管理してもらう」という市政参加の枠組みを作り、どうやったら同世代の人に響く情報発信ができるのかを考え、実践してもらう。そういう形での巻き込み方が出来ればいいと思う。

<佐々木委員>

若者を引き付けられるような情報発信ができていないのは、職員のアイデア不足なのか、それとも、行政としての形式的な制約が有るからなのか。

<事務局>

発信する際に情報の正確さなどについて慎重になり、堅苦しくなっている部分はある。目を引く発信という点については、市民しんぶんは変わってきている。そうした視点を持ってはいるが、まだ追いついていないというのが現状である。

<菅谷委員>

既存の枠組みで「官学連携」とよく言われる。大学と連携できれば、それが一番若者を取り込みやすいのではないか。

個人向けに情報発信を行うことも大事だが、まずは大きく若者全体を取り込んで、市政に関わったことの認識を持ってもらい、市政をもっと身近に思う人が増えれば市政参加の裾野が広がるのではないかと思う。

<杉山座長>

例えば、大学の授業などで連携するということか。

<兼松委員>

勤務している大学で「若者の市政参加に関するアンケート」を実施した。

また、まちづくりお宝バンクに登録している方に学生が話を聴くという授業をしたのだが、学生にとってすごくいい出会いだったようで、「いい大人と出会えた」という声を聞いた。実はこれも結果的には市政参加になっていて、「自分も市政に参加したのか」と思ってもらえた。

このように、気づけば参加しているという形がよい。自分の興味のある活動とどう結び付けられるのかというのがポイントだと思う。

<篠原委員>

兼松委員の言うように、SNS をやるなら、当事者にやってもらうのがいいと思う。大学生はツイッターをしない人も多くなっていると聞き、インスタグラム、もしくは自分達だけのクローズした中でやり取りしているということも聞く。

市が運営する場合、一度決めるとなかなか変えられない。そこが柔軟にならないと、若者についていけなくなるのではないか。

京都府の取組で「子宮頸がんの検診を受けてもらうためにどうすればいいか」ということを話し合ったことがあった。その時に学生から「学食で配る新聞に載せればいい」という意見が出て、その広報紙には、学生が子宮頸がんについてインタビューを受けるという形で載った。ママ向けには、私がインタビューされる形で、幼稚園で配られるフリーペーパーに載せてもらった。そんな形で、各世代がよく目にする広報媒体に同世代の人間がコメントする形だったら見るのではないか。

<池田委員>

大学にある紙媒体なら、見るかもしれない。フリーペーパーというのはいいと思う。

SNS は、ツイッターからインスタグラムに移行している友達が多い印象である。ただし、投稿せずに見るだけか、めったに見ないという子も多い。

<篠原委員>

インスタグラムの次の SNS ツールが出てきたらどうするか、という問題もある。

<大鳥井委員>

京都市の若者向けに SNS を新たに作っても、自らフォローしに行くかと言われれば必ずしもそうではないと思う。大学生が何かイベントやワークショップに参加しようと思ったら、大学のポータルサイトに挙がっているものを見て参加することが多いと思う。

<佐々木委員>

ラインはどうなのか。企業はラインでの発信が多い印象である。

<池田委員>

ラインも、まずは追加しないとタイムラインに情報が流れて来ないので、見ない。

<杉山座長>

若い社会人や、高校生に関しての取組についてはどうか。

情報発信が足りていないのではないかと、というのが大方の意見かと思うが、大学生に限らず幅広く若者に対して、御意見があればいただきたい。

<兼松委員>

自分からは市政参加の場に来ないが、みんなと話してみたら興味を持ったというように、響く人には絶対に響く。高校生でも大学生でも、社会人でも、いかに必須にさせるかということだと思う。

<篠原委員>

例えばこのフォーラムがそうした若者が集まる場に出て言って、取り込むということだと思う。

<杉山座長>

ヒアリングに行った際に、「人との出会いがあって参加した」「信用できる人に言われると背中を押される」という意見を聞いて、なるほどと思った。「何かをやりたいと思っている若者も多い」と聞いて、それも、なるほどと思った。

また、「市政に参加したいと思った際に、どうしたらいいのか分からない、誰が信用できるのかが分からないので、信頼できる大人が先導してくれると参加する」という意見をいただいた。

若い社会人の方も同様のアプローチによって市政参加したいという人が出てくるのかもしれない。

<佐々木委員>

ユースサービス協会にヒアリングに行った時に、「クラブ活動化したらいいのではないか」という意見が印象的だった。海外ではそうした取組があるという話も聞いて、印象に残っている。

<内田副座長>

ユースカウンスルの話だと思う。小学校ぐらいの時から市政に参加するよう介入していくことだと思うが、それは資料 3 の課題の部分に載っている「市政や政治等について安心して話せる場所がない」ということだと思う。

政治だけに限らず、NPOについても、ちょっとそうした話をする「そんなことを考えているのか、えらいやつだな」みたいに言われて疎外感を感じ、そうした人が NPO に来て、やっと自分が思っていたことを遠慮せずに話せた、という人は多い。

政治や行政に対して何か言うと、のけ者にされるのではないかという恐怖感があり、それが無い、安心して話せる場所は探して見つかるものではなく、偶然出会うしかないのが現状である。そうした場を設けることは大事なことだと感じた。

<森川委員>

私も市民公募委員の方にヒアリングに行き「周りで同じような活動をしている若者はいるか」と質問したが、その方は「いない」と答えた。その方のように、現在市政に参加している若者は、孤独に頑張っているという印象である。

そうした若者に対して、市政に参加するよう背中を押したり、強制的に参加する場を作ったりするなど、きっかけの場を作れるのは大人の側である。行政だけで行うのは限界があるので、どのようにするのが課題である。

<篠原委員>

中学校や高校であれば、市政参加の授業をするのが有効だと思う。カリキュラムが決まっているので難しいと思うが、授業で教えるのは手っ取り早い。内田委員が言ったように、政治について安心して話せる場があるということ伝えることはできると思う。

<杉山座長>

シチズンシップ教育については、まだ全然されていないのが現状なのだろうか。

<事務局>

市が所管する「青少年育成計画」により取り組んでいるが、まだ学校との連携が十分に進んでいないのが現状である。

<内田副座長>

授業で教えるという事については、効果が出るのが何年か先になるという話もある。

<金田委員>

授業のように多くの人に対して周知する方法と、一本釣りのような形で周知する方法と、両方が必要だと思う。

前者でいうと、福祉教育もそうだが、マスに対してプログラムを組むと、それが逆に、学びとして短絡的なものになるという危険性もある。

伝え方を工夫しないと、「市政参加は面倒くさい」、「関わらない方がよい」という意識を与えてしまう危険性もあるので、丁寧にやる必要がある。

<篠原委員>

市政には、左京朝カフェ的な参加型のまちづくり会議も含まれるのか。

<事務局>

市側が用意したものに参加してもらい、という大きな意味で言うと、含まれる。

<壬生副座長>

大学の授業で、市政参加を採り上げようと、パブコメやアンケートを模擬で実施したりしている。今回のアンケート結果と同様に、「そもそも知らなかった」「知っていたが自分が参加するものと思っていなかった」という感想が多かった。また、「資料が難しい」「字が多い」という意見もあった。パブコメの冊子は、概要版でも分厚い。そして、「どの部分について意見を言ってもいいか分からないので、特に意見を欲しい箇所を明確にしてほしい」という意見があった。

全部のパブコメでそうした問いを行政側が設定する必要はないと思うが、ハードルを下げる、簡単に参加できるような仕組みも少しずつでも提案していければよい。

<杉山座長>

素直な気持ちを書いてもらえればいいのだが、現状では内容が多くて難しく、素直な意見を述べることさえも難しいのだろう。

情報を発信するということ、色んな人に関わってもらおうということ、そして、情報の提示の仕方という点について、若者の市政参加を進める上で改善の余地ありとのことで意見をいただいている。他にどうか。

<大鳥井委員>

私もパブコメを書いてみようと思って冊子を手にとったが、内容量が多く、何について答えたらいいのか分からなかった。また、実際に自分がちゃんとした意見を述べる事が出来るのか不安になった。ヒアリングでも「審議会で専門家に交じってちゃんとした意見が言えるのか不安になる」という意見があったので、「ちゃんとした意見が言えるかどうか」という点をハードルに感じられていることを実感した。

<佐々木委員>

パブコメに限って言うと、法律や条例の規定については、難しいがそう書くしかない場合があるので、そういう部分についてはどうしようもないと思う。

<杉山座長>

先ほどの話で言うと、そうした部分をもう少し噛み砕いて、説明してあげてはどうか、ということではよかったか。

<壬生副座長>

そうである。パブコメで言うと、計画案と概要版を作られることが多いと思うが、概要版は確かに内容量が少なくなっているもの、難しさについてはあまり変わっていない印象である。どう噛み砕けるかという点については、もう少し考えていけるのではないか。

<事務局>

以前に比べれば、概要版は内容を削り、イラストを多く入れるなど工夫している。しかし、要求されているような、「パッと目にはいって、理解しやすく、どんな形でも意見が言えるという雰囲気醸し出している」というところにまでは至っていないのが現状である。今日頂いた意見は、我々の方から全庁に伝えていきたいと思う。

<兼松委員>

年に一度、若者に関係のあるパブコメを一つ、ものすごく噛み砕いて説明した形で実験的に実施してみるというのはいかがでしょうか。

<篠原委員>

パブコメを募集するためのワークショップをやってみるのはどうだろうか。「書く」となると、「ちゃんと書かなければ」という意識が働く。それは若者に限らず、大人でもそうだと思う。「言う」ことだったら、できるかもしれないので、説明があったうえで、意見を言える場を設けると、もしかしたら違った結果が得られるかもしれない。

<森川委員>

パブコメ普及協会はそうしたことはしていないのか。

<事務局>

市民参加推進計画を改定する際にはワークショップを行った。パブコメ普及協会は、何かイベントに合わせてブースを設けて、説明して意見を集めるということを行っている。

<森川委員>

私は個人的には資料を分かりやすくする方向にばかり注力するのは危険だと感じている。昨今の施策は複雑な判断を含んでいることが多いと思うので、細かい内容が省略されてしまうのではないかと、実際の内容とかい離れたものになるのではないかと不安がある。そのかい離をどう乗り越えるのか、というのがとても難しい課題だと思う。

パブコメについては、そこに割ける労力がどのくらいか、という問題もあるし、そうした判断をどこかでしないといけないのだと思う。

<杉山座長>

まさに、今後どのあたりを重点的に取り組んでいくかという点が、御意見をいただきたい点である。

今まで挙がった意見としては、情報を知ってもらえる工夫をしよう。市政に入ってもら

うハードルを下げよう、その一環でパブコメをしやすくするためにはどうすればいいかという話になった。もう一つは、大学ごと巻き込んでしまう、そうすれば参加しやすくなる、ということだった。

他に御意見はあるだろうか。

マスでやることと丁寧なやるとの両方が大事だという意見があった。情報発信だけやっていたらいいのではなく、例えば、若者を呼ぶワークショップを開催する際に情報発信を工夫してみる、というような形で、工夫して取り組む必要があると感じた。

そういうことについてもご意見をいただけたらと思う。

<森川委員>

前回の会議でも発言したが、「若者に市政参加してもらいたい」というのは、「本当の意味での協働の担い手を増やしたい」ということだと思う。それで言うと、ヒアリング対象者は、担い手となり得る人たちだという実感は得た。ただ、孤独に頑張っているのが実情である。

学生からの意見を見ると、学生の市政参加のモチベーションは、「自分にとってどういう利得があるか」が判断基準になっているということが読み取れる。その意識を転換していく場面が必要だと感じる。

京都の地域の方たちは、授業などで地域に関わる学生に対して手厚く面倒をみてあげている。そういう地域の方達には「これからを背負う若者の為に」という思いが根底にあって、利得的なところは二の次である。

とりあえず、門戸を大きく開いて多くの方に参加してもらおう。その一方で、一本釣りしていく。大人の側から若者に手を差し伸べることが必要だと思う。

<杉山座長>

一本釣りした方がいいということか。

<森川委員>

両方必要なのだけれど、本当の意味で市政参加する人を育てるには、そっちの方がより重要なのではないかということである。

<佐々木委員>

自分の学生時代を考えると、市長のような、市政につながる人と出会える場であれば、面白そうだと思うって行って見たかもしれない。

<杉山座長>

動機を高めることが大事だということと理解した。

重視する点については他に何かないか。

<兼松委員>

大鳥井委員にお聞きしたいが、就活のために時間を積極的に使う学生は多いと思うが、市政参加が就活にどうつながるか考えたことはあるか。

<大鳥井委員>

自分は大人からの声かけで公募委員となっており、期待されているという感覚に後押しされて市政参加したのでよく分からない。

<池田委員>

就活というと自分はまさに今その立場にいるが、「就活に役立つ」と言われると参加すると思うが、自分から就活にどう絡めるかというところまでは考えられない。

<兼松委員>

母数が増えれば届く人数は増えるので、母数を広げることも大事だと思う。

就活は自分ごと化しているので、市政参加をそれにかからめることは、自分ごと化する際の一つの動線になり得ると思う。

<杉山座長>

母数を広げることが大事だし、かつ、いい大人との出会いや動機付けも大事だということだろう。

<森川委員>

ヒアリング対象者は、地元で公務員になると言っていた。そういう意味では、公募委員としての経験はいい経験になっているようだ。

以前ある学区で活動しているゼミの先生に聞いたが、学生も本当にいい経験をすると、就活でもその経験を話す、ということはあるようだ。

<杉山座長>

マスを広げるために、直接的な利得と絡むようなことも大事ということか。

<篠原委員>

利得とは、目に見えるものだけではない。市民会議に学生や小中高生が参加すると、自分の親じゃない大人が、自分の街のことについて一生懸命話していることが刺激になっていて、それが、「自分も参加者になろう」というきっかけになっている。

また、若者がそういう場に参加することによって、大人もやる気になり、お互いにいい関係が築ける。意見を言うだけでなく、実際に活動していくという形でもつながっていく。

そして、そういう場への参加者は一本釣り参加を呼びかけていて、知っている人からの声掛け、という形が多い。以前、100人規模の市民会議に参加したが、そのうち10人くらいが中学生だった。町長や議員も参加しており、普段お互いに直接出会う機会がない分、町長や議員側は中学生の発言を積極的に活かそうとするし、それを感じ取った中学生も熱心で、場全体に高揚感があった。京都市は規模が大きいので、そういう取組は区単位だったらできるのかもしれない。

<杉山座長>

マスでいくより、丁寧に行く方がいいのではないかという事が多かった印象である。時間が迫っているので、あとは事務局に取りまとめをお願いしたい。

議題(2) 施策1, 4, 5, 8の進捗管理について

<事務局>

(資料4「施策1, 4, 5, 8を分析するための情報について」説明)

<杉山座長>

資料を見て、あと2年で特に重点的に取り組んではどうかという点について御意見をいただきたい。

<壬生副座長>

施策8「アンケートで結果を公表している割合」で、公表数が4となっているが、どの程度のものを「公表」としてカウントしているのか教えて欲しい。「現状認識」に「小規模なものから大規模なものまで多岐にわたる」とあるので、アンケートの実施数が11ということもないと思うのだが、どうか。

<事務局>

イベントを実施した際のアンケートは除外しており、市政について意見を聴くものについて照会した結果、挙がってきたのが11件である。そのうち、報告書として公表しているものを「公表」としてカウントしている。

内部情報として状況を把握するために実施しているアンケートというものもあり、公表していないものもあるのが現状である。

<壬生副座長>

結果を公表すべき、しなくてもよい、という精査の基準はあるのか。

<事務局>

こうした形でアンケートの公表状況を把握したのは今回が初めてであり、精査はこれからはなくてはいけないと思っており、基準があるわけではない。

<佐々木委員>

アンケートを実施して、その結果を公表すべきかどうか精査するということが自体が不可解である。全て公表できるのではないか。

<事務局>

毎年実施して、経年変化として数年後に公表する、ということもあるのかもしれない。アンケート自体の中身も調べないといけないと思っている。

<壬生副座長>

自分がアンケートに答えた場合に、他の人がどう答えたのかを知りたいという感覚があるので、それが分からないのは少し残念である。

<佐々木委員>

アンケートの実施後に、回答を見て公表するかどうか決めているのか、そうした点も気になる。

<事務局>

回答を見て公表するしないを決めることはないと思う。単に公表するということにまで意識が向いていないというのが、現状であるのかもしれない。

その点については、今回把握したので、アンケートの中身等について精査していきたい。

<森川委員>

前回の会議の際に、データの個票についても開示してもらえると、大学での研究に活用できるという意見が出ていたと思う。

アンケートを実施する場合は、実施前の段階で、最終的にオープンデータとして公表するというところまで考えて実施するものだと思う。

<杉山座長>

アンケートについては、今後、もっと公開して欲しいという意見として理解した。

他に何か意見はあるか。

<森川委員>

外国人の方が増えてきている。ユニバーサルデザイン化についても、大事な視点だと思う。

<杉山座長>

傍聴可能な会議等での参加の仕組みのユニバーサルデザイン化の推進という点で言うと、非常に実施数が低い。時代の流れで言うと、伸びしろが多い分野かと思う。

<篠原委員>

施策 5 の「市政情報の発信における、誰もが読みやすい工夫」という点だが、具体的な内容についてはこの場では話さないのだろうか。

災害があった場合に、緊急避難情報が出ても、「学区」単位で出るので非常に困ったという声をよく聴いた。京都は、大学生、旅行者など、学区感覚が無い人もとても多い。発信の方法も含めて、中身についても検討するのであれば、その点も考えていきたいと思う。

<杉山座長>

大事な視点である。まさに、助け合い、地域づくり、まちづくりにからんでくることかと思う。こうした観点もこの施策には含まれるのか。

<事務局>

分かりやすい発信、という点では含まれるだろう。

<篠原委員>

せっかく情報を発信しているのに、それが伝わらないともったいない。

<事務局>

避難情報の発信については、悩みながらやってきている。

地域に長年住んでいる人にとっては、学区はすぐにイメージでき、また、地域での活動や避難所運営等も元学区単位で行っているのが現状なので、その方がなじみ深いということもある。

地理に不案内な人に対してそうした情報をどう伝えていくかという点については、技術的な面でも非常に難しい。色々研究させていただきたいと思う。

<篠原委員>

海外の人、旅行者に対しては、ツイッター等で発信することもできるのかもしれない。すごく大変だとは理解している。

<兼松委員>

私は近年京都に引っ越してきた立場だが、自分の家族を守るために、自分で避難所等を調べたりしたので、ある程度市民側にも努力は必要なのかもしれない。

<杉山座長>

行政だけでなんとかするという話ではなく、ワークショップ等で市民には何ができるのかを考えたりする等、自主防災等と関係する話だと思う。そういう場に、障害のある人など、色々な人に入ってもらうことが、大事なのだと思う。

<兼松委員>

パブコメについては、市の見解も含めて、実施された内容が公表されているが、公表の仕方がバラバラであるので、市民の手応えにつながっているのか分からない。意見を出してもらった人に分かりやすく伝える、ということから改善していくことができる気がする。

また、パブコメ実施後すぐ、それから数年後、とフィードバックする段階が色々ある気がする。3年前に実施したパブコメの後、こうなった、というような事例があれば、手応えにつながるのかもしれないと思った。

全てでなくても年に1つでもいいので行ってみることもできるのではないかな。

<杉山座長>

貴重な御意見をいくつかいただいた。事務局にまとめていただき、次の会議でまとめたものをみてまた議論したいと思う。

では、議題3について事務局に説明をお願いします。

議題(3) 市民公募委員サロンについて

<事務局>

(資料5「平成30年度市民公募委員サロンについて(案)」説明)

<杉山座長>

市民公募委員サロンは、市民参加推進フォーラムが主催する取組である。我々が主体となって実施する取組であるので、何か御意見がある方は発言をお願いしたい。

<事務局>

現時点では10人の方に申込みいただいている。

<兼松委員>

テーマ「公募委員の発言，どう活かされている？」というのは，公募委員に「手応えをどう感じているのか」という事を聴くということでよかったか。ニュアンスとして，市側が「公募委員の発言をこう活かしている」ということを話すともとれる。

<事務局>

パネルディスカッションのテーマとして考えたものであるので分かりづらくなっているが，兼松委員の言うように，「自分の発言が活かされた実感するときはどういうときか」，ということ話し合ってもらいたいということである。

<佐々木委員>

申込期間はいつからいつまでなのか。

<事務局>

申し込み締め切りは12月3日である。この会議後，もう一度周知を行おうと思っている。開催までの残り10日ほどで，参加者数の激増は難しいかと思うが，じわじわと増えることは考えられる。

<篠原委員>

参加する人たちは，何を目的として参加するのか。

<事務局>

市民公募委員の方は沢山いるが，専門家の中で発言しにくいという方も多くいると聞いているので，そういった方たちに集まっていただき，フォーラム委員の皆さんや他の附属機関等の公募委員の方と話すことで，自身が所属する附属機関等会議での役割を再認識し，活動しやすくなることを狙いとして実施している。

案内としては，「公募委員としての立ち位置を交流を通して考えてみませんか」という形でしている。過去の参加者からは，おおむね好評いただいている。

<篠原委員>

案内文に書いたようなことを，実際に話せるようなテーマのほうがよいと思う。

<兼松委員>

公募委員サロンに出たあと，自分の発言がこう変わった，というようなことが聞いたら面白いと思う。そういう姿をみると，自分も真似してみようか，という気持ちになるかもしれない。

パネルディスカッション形式にするなら，公募委員になって日が浅い人，時間が経って

いる人と、色々な人がいるといいと思う。

<佐々木委員>

12月18日までの間に、我々が準備しておくことはあるのか。

<事務局>

テーマについて御意見を頂ければ、それを共有させていただき、進行案を固めていきたいと思っている。

<佐々木委員>

そうであれば、申し込み締め切りをもう少し延ばしてもよいと思う。

<事務局>

事前に参加者数を把握しておきたいということがあったので、締切を早めに設定した。締切を少し伸ばして、残り2週間程度で更に周知していきたいと思う。

テーマについては事務局としてこだわりがあるわけではないので、何かあれば教えていただきたい。

<金田委員>

内容についてだが、一部と二部で分けているが、案1だと二部制にする意味があまりないと思う。二部制にするなら、一部はもっと参加者同士語りあえたり、悩みを共有する場であったりと、公募委員側の視点に立ったものの方がよいと思う。

<篠原委員>

会議で発言がしにくい、という参加者が多ければ、「どういうことに困っていますか」と最初に聞いてしまってもよいのかと思う。

<杉山座長>

今までの流れだと、グループ交流になった際に、それぞれが抱える悩みが色々出てくる印象である。なので、第一部は「公募委員の発言はこういう形で活かされていますよ」ということをみんなで共有して、第二部で個別に話してもらい、という形をこれまでとはとってきた。

<事務局>

附属機関によって状況は様々なので、いったんどういう状況があるのかを全体で共有して、個別に話していきましょう、という構成である。司会等については座長に一任する。

<兼松委員>

一昨年は自分が司会をした。企画から行ったのですっきりまとまって進めていけたと感じている。当日司会だけを任されるより、企画から参加した方がやりやすいと思う。

例年、参加者の想いをちゃんと聞き取れた実感がない。もっと少人数グループで出来れば濃密に話が聞けるのかなと思っている。

<内田副座長>

主催者側が多いので、主催者と参加者が2対2になるようにグループを作ってもよいのかと思う。

時間配分はどうなっていたか。

<事務局>

平成28年度でいうと、第一部は40分、第二部は25分×2ラウンドで実施している。

<内田副座長>

第二部もテーマが2つあるが、1の方が話しやすいので、そちらに重点を置くのもよいのかもしれない。第2部はテーマを1つにしぼって、欲張らない方がよいかもしれない。

<兼松委員>

フォーラム委員を含め4、5人程度のグループになった方がよいと思う。

<森川委員>

市の職員もグループに入るのか。

<事務局>

そうである。

<森川委員>

京都市側も公募委員をどう活かすかという議論にはなったりしないのか。

<事務局>

数年前のフォーラムでは議論になり、「ガイドブック」も作成している。

事務局案では、参加者が15人以上集まれば案1を実施するイメージである。

<杉山座長>

では、参加者 15 人以上で案 2 を実施するという進めたいと思う。

テーマや進め方については、兼松委員から「進行役が決めた方がいいのでは」という意見があったが、どうか。

<兼松委員>

第 1 部は委員の方の満足度が高くなるようなテーマで、ということだった。

<事務局>

司会については、今日この場で決まるとありがたい。

<杉山座長>

立候補が無ければ私の指名で、兼松委員にお願いしたいが、よいだろうか。

<兼松委員>

貴重な機会であるので、引き受ける。テーマについてはまた共有させていただく。

<杉山座長>

兼松委員だったら、楽しい場になると思う。よろしく願います。

最後に報告事項について、事務局から説明をお願いする。

4 報告事項

報告事項 (1) 新たに設置された附属機関等について

<事務局>

(資料 6「新たに設置された附属機関等に係る「附属機関等の設置・開催等に関する協議書」について」報告)

報告事項 (2) 市民参加に関する新しい事業や取組について

<事務局>

(資料 7「市民参加に関する新しい事業や取組」報告)

<杉山座長>

本日予定の議題、報告事項については以上である。

傍聴者の方、何か御意見をいただければ。

<傍聴者>

若者の市政参加について、「安心して話せる場がない」「市政に関心がないわけではない」

ということについてだが、大学生よりも若い世代の方に、情報を見てもらう、知ってもらうだけではなく、関心を持つという意識も持ってもらうことが必要だと思った。

行政側も、情報を発信する際に「伝わるかな」という意識を持つことが大事だと思った。

パブコメの資料が分かりにくい、字が多い、SNSでの発信は学生に委ねてはどうかという発言があったが、大学コンソーシアム京都に学生広報部という団体があり、その活動としてうってつけである。また、市内に芸術系大学がいくつかあるので、ビジュアルで訴えるようなパブコメガイドの作成をお願いしてみてもどうか。

シチズンシップ教育についてどう進めればという話題があったが、北区と東山区での「こどものまち」という取組が参考になるのではないかと思った。

<杉山座長>

貴重な御意見ありがとうございました。

5 閉会

<事務局>

本日も、盛りだくさんの内容について御議論いただき、大変ありがとうございました。今年度はまだまだ御議論いただくことがあるが、引き続きよろしくお願いします。

以上